<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>ノラの憂鬱：陳衡哲『ロチスの問題』をめぐって</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>羽田 朝子</td>
</tr>
<tr>
<td>発行</td>
<td>羽田朝子『叙説（奈良女子大学日本アジア言語文化学会）』第38号</td>
</tr>
<tr>
<td>日時</td>
<td>2011-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10935/2857">http://hdl.handle.net/10935/2857</a></td>
</tr>
<tr>
<td>テキストバージョン</td>
<td>パブリッシャー</td>
</tr>
<tr>
<td>作成者</td>
<td>Nara Women's University Digital Information Repository</td>
</tr>
</tbody>
</table>

このページのキーワードは「ノラの憂鬱」、「陳衡哲」、「ロチスの問題」です。
ノラの憂鬱

陳衡哲『ロチスの問題』をめぐって

羽田 朝子

はじめに

中国の五四新文化運動（九一〇年代後半〜二〇年代）において、
近代化を目指す若い知識人たちは、封建制を支える古い家制度か
らの解放を求める。そのなかで父母の取り決めの旧式結婚に反対
し、個人の意思による自由恋爱によって結婚し、近代的な核家族
を築くことを強く主張した。同時に、ともに近代家族を形成し
る新しい女性を希求し、高知に女性解放を求めるのである。
こうした家庭革命と女性解放理論の旗手となったのは、胡適
『新青年』九一〇〇年七月に雑誌『新青年』へ寄稿した『文学改良趨勢』
は文学革命の導火線となり、帰国後は二六歳の若さで北京大学の教授に迎え
られた〈知識青年たちのスター〉の存在となっていった。九一一年六
月、胡適は『新青年』四巻六号におけるイプセン『人形の家』
を翻訳し、女主人公ノラを「個」
を求めめて旧家を飛び出した勇
気ある女性として紹介した。さらに同年九月には論文「アメリカ
の婦人」『新青年』五巻三号で発表して『良妻賢母を超える人生
観を提げ、自由恋爱を経て近代家族を形成しきつつ社会活動
に多く参加する『自由』した女性の姿を模索したのである。
二〇年代になると、新文化運動の薰陶を受けた女性知識人のな
かから、実際に恋愛を成し立って近代家族を打ち立てるノラ
が現れた。しかし、時にあたってその多くは結婚後に主婦とな
るかなか、主婦的な社会活動を続けたことは困難であった。た
とえ個を発揮するべき社会活動を継続できなかったとしても、家事と
職業の両重負担を強いられるのになったのである。早くも
新文化運動期の文壇にいかに早く登場した女性作家である陳衡
哲『新青年』九一〇〇年七月の『ロチスの問題』『洛緯思的問題』
『小説月報』十五巻十号、一九二四年十月も、この時期に創作された小説

主人公であるアメリカ人女性ロチェスは恋人リットルとの結婚よりも社会的成功を選択して独身を貫き、最後には大学教授として学術界での成功を手にするが、家庭の温もりを求めて、孤独に陥る。小説の舞台はアメリカに設定されているものの、多くの先行研究が指摘している通り、中国に現れつつあった近代家族における先行研究の指摘であると主張した。陳衡哲の主張は当時の女性の社会進出を主張していた進歩的知識人からの保守的なものに捉えられ、例えは著名な女性学者の程鋼凡、著書『中国近代女子教育史』（中華書局、一九三六年四月）のなかで陳衡哲の言説を絶対的良倉賢母主義の代表として批判している。こうした陳衡哲の女性論を見ても、彼女が『ロチェスの問題』を創作したことは意外にも思える。しかしこの小説は陳衡哲が近代家族における女性の問題を取り上げた最初の作品であるということから、その背景には彼女の女性としての転機があったのではなかったと考えられるのだ。そこで論者は、陳衡哲が『ロチェスの問題』を創作するために至ったのはどのような背景があったのかを検討したい。先行研究では『ロチェスの問題』の創作時期は問題とされていたが、論者は以下に述べるように、胡適の日記や陳衡哲、胡適との間の書簡によって事実を立証することができた。この時期は陈衡哲が北京大学の職を辞し、子女の養育に専念していた時期と重なるのだ。さらに論者が注目したいのは、この作品の発表月、内容を含め、陳衡哲と胡適の間の書簡に基づいて討論を行われ、その結果として陳衡哲が胡適の間を書簡によって討議が行われ、その結果として先行研究では、陳衡哲が胡適とのブートニックな恋愛をロチェとっ
1. 陳衡哲と胡適

まず陳衡哲と胡適の交友、それぞれの結婚について紹介する。

陳衡哲は江蘇省常州市の人。祖父は杭州知県。父は四川知県をつとめた清朝の官僚であった。陳衡哲はいわゆる旧家に生まれたが、女性の教養を重視する父に幼い時から古典の手仕事を教わるという父の教育を受け、母の叔父の読書や豪華な家庭の生活を受けたのである。また母のしつけも役立っている。陳衡哲は、近代思想の洗礼を受けた人物で、利発な陳衡哲をどのように受入れ、効果的に活発に役立つことを考えた。最终的に、陳衡哲は、英語名・莎菲（Shaffy）を使用して著作活動を開始した。この著述活動に影響を与え、将来の夫となる任鴻鴻を出合うことになる。

陳衡哲は一九一五年にアメリカ留学の機会を得た。一九二七年に帰国後、留学生刺を務めに出ている。任鴻鴻は一九二二年に孫文の臨時政府の文化教育を専攻していた。この時に、陳衡哲は、結婚は女性にとって学びの発展を妨げると考え、彼女の進展を妨げることになる。任鴻鴻は、二十三年、陳衡哲は任鴻鴻の三番目の妹である。書信に次のように言っている。
「心・心意去遠貞」才思。普賢哲是美利堅留學中的。一九五六年，胡適從「留美學生年報」的原稿執筆的依頼を受けたことにきっかけとして、胡適はコロンビア大学に留学しており、友人であった任鴻鈞から陳衡哲の文集について評判を聞いたのが、「心・心意去遠貞」才思。emens。普賢哲は胡適の文学観に同調し、「留美學生年報」（九一七期）に白話で創作した短編小説「卯」を発表した。胡適は年齢をを初め、參加者を为した。普賢哲の女史小説「小雨日」（新雨書店、一九八四年）はのちに陳衡哲の処女小説集「小雨日」に収録された。
が、胡適は親友の任鴻鸞に陳衡哲を讃えていたのか、という記事が掲載されているほどであった。

胡適がスキャンダルを引き起こす危険をおかしながら、陳衡哲との深い友情を育み続けたのには、ひとつは彼女にそなわる結婚をしたことに起因しているだろう。胡適は十四歳の時、母によって江秀（八九〇―九五四）という女性との婚約を取り決めていた。彼女は教育を受けたことのない、鎌足をして旧式の女性である。しかし胡適は母が若くして寡婦となりながらも自分を慈しんで育ててくれたことに強く感謝しており、その母の命に背くことはできなかった。

アメリカ留中の一九三八年、胡適はイェイディスクリフフォード・ウィリアムズというアメリカ人女性と出会い、恋に落ちていった。イディスはコーネル大学の地質学教授の次女で、ニューヨークで美術を学ぶ知的女性に富んだ女性であった。胡適は彼女との交際によって、女性観を「変せられる」ほどの人々を念頭に置いていた。しかし胡適は論文「アメリカの婦人」（新青年五巻三号、一九一八）において、「アメリカ人女性は、個人の才能を発揮し、他人に頼らず、自分で独立した生活をし、社会のために自分のすべき事をする。―良妻賢母を超えた人生観を持っている」と紹介していたが、その「自立」の精神をもつ女性の例として、イディスの名をあげている。

胡適はイディスとの知的な交流に夢中になるが、彼にとって母の命令は絶対なもので、また当時の中国において婚約の破棄は時に相手の女性を死に追いやるほどの重大事であったため、結婚の礼を挙げるが、一方でイディスと晩年に至るまで書簡を通じての交流を持った。

胡適は九七年に帰国するとすぐに初対面の婚約者、冬秀と再婚を誓うが、友人にそれを秘めるように頼んだにもかかわらず、自分が旧式の女性と結婚したことに対し、理想と現実との矛盾を苦しみ続けた。その矛盾を埋めるかのために、陳衡哲は「改めとする多くの女性知識人と交際し、知人の交流をはかることで」の理由で。

2. 女性初の北京大学教授として

陳衡哲は妻の活躍を望む夫と、中国女性の近代化を叫ぶ親友胡
三〇四

討論したと思っていたのだけれど、彼女が予習していないようですね。彼女は最近休息にいってとても大事なものだと思い、さらに、彼女が気を付けると教育に取り組んでいる様子が見えます。

当時の北京大学は、一九二一年に女子の聴講生を受け入れたものの、総数は九名に過ぎず、全体からみれば圧倒的に男子学生が多かったです。さらに陳衡哲が受け持つ授業では、出席する学生の一部が老先生で、息子に嫁がそうなさる年齢の者もいたことでもありました。二〇歳の陳衡哲にとっては、彼を教えることは実に骨の折れる仕事であったに違いありません。

就任後二ヶ月がった十一月二日、陳衡哲は次のような書信を胡適へ送り、学生に対する不満を述べています。当時、北京大学の学生たちは四、五人のかず手を挙げませんでした。このように、人中だった四、五人のしか手を挙げませんでした。六、七〇人

当時の北京大学は、一九二〇年九月に北京大学教授に就任すると、西洋文学と西洋史を学ぶ西洋史のほか、西洋劇の授業を受け持ち、彼女について講義した。就任後一ヶ月を経た十月九日の胡適への書信には、

「私は今彼らの学問に対する精神を示そう。どう「養お」することかが

了解。」とあり、彼女が意気揚々と教育に取り組んでいる様子が見られます。

三〇四

三〇四

三〇四

三〇四

三〇四

三〇四

三〇四

三〇四
 Sofie（陈衡哲）是妊娠后拒绝教授。她对自己的这种行为感到非常内疚，但又无法改变。她和丈夫一直在考虑是否要继续怀孕。这种矛盾让她感到非常痛苦。

然而，她最终决定继续怀孕。她知道，这将意味着她将无法继续教学。但她认为，如果她对丈夫的爱可以延续，那么她愿意为此付出一切。

当她终于被允许继续怀孕时，她感到非常高兴。她知道，这将是她一生中最重要的一部分。她开始计划如何继续教授，同时还要照顾她的孩子。

 Sofie（陈衡哲）的故事告诉我们，有时候，我们不得不做出最艰难的决定。但只要我们尽力而为，我们就能找到最好的答案。
３、「ロチスの問題」の創作

陳衡哲は北京大学を辞職して三年後の九三五年五月一九日、胡適に次のような書信を送っている。まず、彼女は自分が母校ヴァッサー女子大学で耳にした逸話を紹介する。それは同女子大学の女性教授とコロンビア大学の教授は恋人同士であったが、結婚できず、その後女性は独身を貫き、男性は他の女性と結婚したが、毎日手紙をやりとりしていた、というものです。そこで次のように胡適に提案している。「あなたがこの題材で作品を一篇作らせていただきたと思います。私のテーマは女性自身の問題で、あなたが違った使い方があることが分かり、とても面白いと思うのです。」

結局、胡適は忙しいため創作がかなわずかったが、陳衡哲は単独で創作を進め、翌年の一九四一年四月、上記の逸話をモデルとして「ロチスの問題」の第一稿（この時点での題名は「彼女の問題」）を作成した。陳衡哲は「彼女は自述」を書き上げた。「彼女は彼女の問題、彼女は彼女の問題、彼女は彼女の問題」などと繰り返す。この作品は同雑誌の主編もあった刊第一号には掲載されなかったが、「彼女の問題」を徹底的に討論したものと、その出来になかなりの自信も持っていたことがわかるだろう。この小説の「Subjectivity」（自覚）には、私は自信をもっている。私はそれを「女性問題」を徹底的に討論したものと、この書信からは陳衡哲がこの作品を「彼女は彼女の問題」を徹底的に討論したものと、その出来になかなりの自信も持っていたことがわかるだろう。この小説の「Subjectivity」（自覚）には、私は自信をもっている。
第一章

婚約後

半径がだらしないうちにロチュスはワットに婚約解消を申し出、今後は高価な友情を続けることを提案する。ロチュスは、男性にとって結婚は経済的な負担が少し増えるだけでなく、家庭や子供の養育を担わなくてはならず、自分の学問に大きな障害になってしまうのだ。

ところで、学問には差し障りがないのに対して、女性にとっては差し障りがないのに対して、男性にとっては大きな問題になる。ワットは、自分の将来を思って、ロチュスは不快な気持ちを覚える。

ワットは、結婚を頼まれたが、自分とロチュスの婚約は破棄され、彼女は混乱する。

ラの愛

第三章

ワットはハロスから手紙を送り取り、その中にはロチュスからの手紙が入っていた。

ロチュスは彼が高価な席を取るのを許さず、彼女は憤慨する。

彼女は彼女の手紙を書き上げ、ロチュスに送る。

「ワットはロチュスの手紙を愛している」と書かれている。しかし自分がロチュスと結婚したことは思い知らされる。

永遠にロチュスを愛していると書かれている。しかし自分の心では、ロチュスは自分を愛していないと考える。

第四章

内容の手紙を書き上げ、ロチュスに送る。

中年になったロチュスは大学教授となっている。彼女は彼を尊敬している。

自分がワットと結婚したことは、自分を愛してもらいたいことを示している。

ワットと結婚したことは、自分を愛してもらうことを示している。

ワットは、自分を愛してもらうことを示している。しかし、自分を愛してもらうことを示している。
4、胡適との往復書簡による討論

陳衡哲と胡適の討論は一九四四年三月三日、八月二日、一ヶ月末まで書簡によって行われた。今日ではこの部分の胡適の書簡が残っていないが、陳衡哲の胡適宛書簡から二人の討論の内容を推測することができる。

胡適はまず第三段落の内容に対して不満を持っており、改作する必要があると指摘したようである。彼にとってワットが突如としてこの女性と結婚することを許可することは不能である。彼にとってワットが結婚するという描写が不公平に思えたのである。そしてこの描写を削除するか、もしくはワットの人物形象にクランドール（Granfell）教授の話を加えたらどうかと提案した。

ようやく陳衡哲自身の北京大學教授辞職の経験に基づくものと考えられるのである。

そしてロチスが独身を通じて甘い苦しみ、ワットが他の女性と結婚し子供とかも幸せに暮さずという、一種の人生を対比的に配置したことにより、『者択』の苦しみが女性だけのものであることが強調されている。これによりこの作品が陳衡哲の言うように『女』を徹底的に討論したものであることがわかる。

しかしその後、この第一稿をくめて、一ヶ月にわたり胡適と陳衡哲の間で討論がなされることになる。

クランドールの話とは、胡適がアメリカ留学中に耳にしたものをである。士本工院の理化学科主任であったクランドール教授は、胡適はすぐにこのクランドールの逸話を思い出し、彼女を生涯愛しようと心を決めていたという。胡適は留学当時のこの逸話を聞いてとても感動し、日記に書き留めている。

これに対し、陳衡哲は次のように反論している。「作品」重ねられた部分は第三段落と第四段落なのではない。「作品」重ねられた部分は第三段落と第四段落の境界を示すものであり、彼女が受ける苦しみを描き出している。第三段落末には反論の主要な部分は第三段落と第四段落の境界を示すものであり、彼女が受ける苦しみを描き出している。第三段落末には反論の主要な部分は第三段落と第四段落の境界を示すものであり、彼女が受ける苦しみを描き出している。第三段落末には反論の主要な部分は第三段落と第四段落の境界を示すものであり、彼女が受ける苦しみを描き出している。第三段落末には反論の主要な部分は第三段落と第四段落の境界を示すものであり、彼女が受ける苦しみを描き出している。第三段落末には反論の主要な部分は第三段落と第四段落の境界を示すものであり、彼女が受ける苦しみを描き出している。第三段落末には反論の主要な部分は第三段落と第四段落の境界を示すものであり、彼女が受ける苦しみを描き出している。
あなたは私の心を灼く燃える人間です。
結びにかえて——ノラの憂鬱

陳衡哲は当初「ロチスの問題」を「努力通報」に掲載する予定だったが、彼女が自分と胡適との問題意識の間に埋めがたい溝があることを感じていたのが疑えるだろう。

「彼女が自分と胡適との問題意識の間に埋めがたい溝があることを感じていた」

作品化した。しかしそのテーマは、あくまで近代家族の神聖性を疑わず、恐れを抱き続ける胡適には、興味を惹かぬものであった。

「そのテーマは、あくまで近代家族の神聖性を疑わず、恐れを抱き続ける胡適には、興味を惹かぬものであった」

一方で、「ロチス」のプラニックな恋愛を模倣するものである

「一方で、「ロチス」のプラニックな恋愛を模倣するものである」

合計、陳衡哲は第三段落にクラシカルなプロットを書き加え、かつ、女性の従属を強いられるというテーマを貫いたのである。

「かつ、女性の従属を強いられるというテーマを貫いたのである」

「女性の従属を強いられる」というテーマを貫いたとされている。

「女性の従属を強いられる」というテーマを貫いたとされている。
以下の陳衡哲の胡適宛て書信により、第三段落における手紙のプロットは後から付け加えられた可能性が高いと考えられる。

あなたが「抽象的すぎ」という批評はとても良いと思います。三段落は従来の位置にありますが、もう少し具体的な描写をしてほしいと仰っています。私としては手紙（プロット）を一回通読み、第三段落に付けて goedようと思思います。あなたの絵の写真のようなものを描くのを忘れてはならないです。

函二通・補入第三段落

一九三五年五月三十一日胡適の日記より「胡適日記全編」四巻、前掲

陳衡哲致胡適信「九四・二・三」（同註三）

以下の陳衡哲の胡適宛て書信により、第三段落における手紙のプロットは後から付け加えられた可能性が高いと考えられる。

あなたが「抽象的すぎ」という批評はとても良いと思います。三段落は従来の位置にありますが、もう少し具体的な描写をしてほしいと仰っています。私としては手紙（プロット）を一回通読み、第三段落に付けて goedようと思思います。あなたの絵の写真のようなものを描くのを忘れてはならないです。

一九三五年五月三十一日胡適の日記より「胡適日記全編」四巻、前掲

陳衡哲致胡適信「九四・二・三」（同註三）